

魔法少女がチャライ敵幹部にカリカリ♡シコシコ♡
意地悪痴漢されて身も心もトロトロになつてしまう話

ガタゴトと揺れを繰り返す、平日の朝の満員電車。車内は押し潰されそうなほどの人混みで、淀んだ空気が満ちていた。

(…眠い……っ)

月乃は小さくあくびを噛み殺しながら、左手で吊り革を掴み、右手でスマホの画面を見つめていた。画面に映し出されているのは、先週行われた大学の講義の資料だ。

大学生という表の顔を持ちながら、月乃にはもう一つの重大な役割があった。光の力を操り、人々の魂を守るため、魔族や魔物と戦う魔法少女ルナ。

昨晩も深夜に強力な魔物が現れ、月乃はボロボロになりながら夜が明ける寸前まで戦いを繰り返していたのだ。結果としてベッドに入れたのは数時間のみ。今日は大事な期末試験の当日だというのに、

机に向かつて試験勉強をする時間もなくに取れなかった。

（魔法少女としての戦いも、大学生活も、どっちも頑張るって決めたんだもん……。ここで単位を落とすわけにはいかない。しつかりしないと……！）

心の中で自分に強く鞭を打ち、閉じそうになる目をこすりながら文字を追う。画面の向こう側の専門用語を頭の中へ詰め込もうとしたその時、月乃の身体に奇妙な違和感が走った。

（……え？）

お尻のあたりに、何かが押し当てられているような感覚がある。

最初は単に、車内が混んでいるせいだと思おうとした。しかし、

その疑念はすぐに恐怖へと変わった。

月乃のお尻に当たっている何かは、明らかに意図を持って動いていたのだ。それは月乃の薄いスカートの上から、太ももの外側へ向けて、ねつとりとした動きで這うように撫で上げてくる。

月乃の心臓がドクンと嫌な音を立てて跳ね上がった。

（ち、痴漢……っ！？）

どうしてこんな大切な試験の日の朝に、こんな目に遭わなければならないのか。月乃の脳裏に、恐怖と激しい苛立ちが同時に湧き上がった。

月乃は唇を震わせ、精一杯の拒絶を込めて小さな声で呟いた。

「やめて、ください……」

しかし月乃に触れている手は月乃の抵抗を嘲笑うかのように月乃のお尻をふにつ、と揉みしだいた。

肉を掴まれるダイレクトな感触に、月乃の脳内で何かが弾けた。恐怖を塗りつぶすように、魔法少女としての強い怒りと正義感が胸の奥から湧き上がってくる。

（こんな卑劣な行為、絶対に許せない……！怖いけど、魔法少女として、一人の人間として、はつきりと言わなきゃ……！）

月乃は深く息を吸い込み、先ほどよりも少し大きな声で強く言い放った。

「やめてください……！警察呼びますよ！」

その言葉と同時に、犯人の顔を見てやろうと勢いよく振り返った。
その瞬間。

「あはは、やつぱり。…変身してないと一瞬誰だか分かんなかったよ、ルナちゃん？」

耳元に、すつと吹き込まれた軽薄な声。月乃は思わず叫びそうになった。

そこには整った顔に邪悪な笑みを浮かべた男の姿があった。
派手な金髪に、いくつも穿たれた耳のピアス。今風のチャラついた青年に見えるが、月乃はその瞳の奥に宿る、禍々しい魔力を知っていた。

「キョウ……マ……ッ!?」

月乃の喉から、掠れた声が漏れる。

敵の魔族幹部、キョウマ。そこに立っていたのは幾度となく戦場で出会い、死闘を繰り広げてきた相手だった。

何故こんなところに、キョウマがいるのか。月乃の指先が恐怖で微かに震える。

しかし、月乃はすぐに自分の使命を思い出した。月乃は魔法少女ルナなのだ。

（落ち着いて、私……! こんなところで、もしこの魔族幹部が暴れたら周りにいる人たちが危険。今すぐ止めないと……!）

月乃は変身道具の三日月の飾りがついた指輪に魔力を流す。指輪が月乃の魔力に呼応して真つ白な輝きを纏い始める。

「へえ…、こんな人間が多い場所で変身するの？ 正体バレちゃうよ。」

キョウマは焦った様子もなく、周囲の乗客に視線を巡らせた。スマホの画面に没頭するサラリーマン、イヤホンをして眠る学生。誰も、すぐ目の前で魔法少女と魔族幹部が対峙していることなど知らない。

キョウマはクスクス笑いながら、月乃の耳に唇が触れそうなほど近づいて囁いた。

「それにさあ、君が変身するより、俺がこの電車内を地獄に変える

方が、多分速いよ？」

「…っ！」

月乃は慌てて魔力の流れを止める。

キョウマの言葉は脅しではない。魔族幹部なら、この狭い車内を一瞬で地獄に変えることなど造作もないのだ。それほど彼らは強く、恐ろしい力を持っている。

「どうする？ ルナちゃん。周りのみんなを巻き込んででも、今、俺と戦う？」

楽しげに揺れるキョウマの赤い瞳が、月乃の良心を完璧に人質に取っていた。

月乃は悔しげに唇を噛みながら、変身道具の指輪が嵌められた右手を力なく開いた。

「……っ、うう……卑怯よ。あなた達はいつもそうやって……!」

「あははっ! 卑怯って何? 俺、魔族だから人間の難しい言葉わからないや。」

キョウマは月乃が変身を諦めたのを確認すると、月乃の太ももに手を伸ばして迷いなく触れた。

(……っ、う、嘘……っ。変身できないのに、こんなこと……っ)

そのままゆっくりとした手つきで撫で回す。

すり、すり…♡

「…んっ！」

（あっ♡その触り方、だめ…っ！）

月乃は思わず背中をビクンと跳ねさせた。

キョウマは月乃の密かな震えを見逃さず、ニヤニヤと意地悪な笑みを深める。

「別に触ってるだけだし平気でしょ？まさか魔法少女のルナちゃんに敵に触られて感じちゃったりしないもんね？」

キョウマはわざと電車のガタゴトという揺れに合わせて、指の腹で月乃の太ももをしつこく撫でた。

スリスリ……♡ スリスリ……ッ♡

（いや、いやあ……っ♡そこは、くすぐったくてゾワゾワするか
ら、だめえ……っ！今まで非情に私を倒そうとしていたのに、急
になんでこんなことするのっ……!？）

真面目で大人しい月乃は、男の人にこんな風に触られた経験なん
て一度もない。

キョウマは魔族でありながら、人間の女性を悦ばせる触り方を熟
知している様子だった。

「ねえ、ルナちゃん。ここ、すっごい柔らかいね？もしかして、
まだ誰にも触らせたことないの？」

耳元で、キョウマの吐息がふうつと吹きかけられる。

「ん、んんっ……！は、う……っ♡」

（だめ、声、漏れちゃう……っ♡隣の人に、聞こえちゃう……っ！お願い、みんな、気がつかないで…）

ゴドゴトツ！ゴドゴトツ！

電車がカーブに差し掛かって大きく揺れた。月乃の肩がすぐ隣のサラリーマンの肩に軽く当たる。

（あつ、ダメっ！！私が痴漢されて感じちやつてること、バレたかも……！）

月乃は心臓が止まるような恐怖に襲われたが、幸いそのサラリーマンはスマホの画面に夢中でこちらを気にする様子もない。

「顔真っ赤だけどどうしたの？ 触ってるだけだし、魔法も何にも使っていないんだけどな。」

当たるか当たらないか、月乃が声を漏らしそうになつてしまうフエザータッチをしながら、キョウマの手がゆっくり月乃の脚の付け根。恥ずかしいところに近づいてくる。

さわ…、さわ………♡

「はう…、…♡ん、……あつ♡」

（ダメ♡ どんどん上がってきてる。電車を降りたいけど、今逃げ

たらキョウマが何するかわからないから我慢しなきゃ…!）

キョウマは太ももを撫でる手を動かしながら、品定めするようにじつとルナの身体を見つめる。

「ねえ、さつきからここ、電車の揺れに合わせて、すっごい揺れてるの気づいてる？ ルナちゃんつてさ、脱いだら相当胸、大きいでしょ？ よし、こっちも、カリカリ♡ってしてあげるね。」

「っ!?!…あっ…んんっ♡」

キョウマの大きな手が、今度は月乃の胸へと伸び、薄手のブラウスの上からその柔らかな膨らみを驚掴みにした。

……ぎゅむ♡

（あ、あんっ♡胸、ぎゅむって、されてる……っ♡誰にも触られたことないのに…）

「ふふっ、ここ触られると人間の女の子は弱いよねえ？」

キョウマは爪を立てて服の上から、ピンポイントで月乃の乳首をカリカリ♡とする。

カリカリ♡カリ、カリカリ♡

「ん、んんーっ♡」

（いやああッ♡そこ、カリカリって、爪でなぞらないでえ……っ♡頭が痺れてきちゃうよお…♡）

「ははっ！ いい反応。ほら、もつとカリカリ♡、カリカリ♡って
してあげるね？」

月乃の膝が小刻みに震え始め、崩れ落ちそうになる。月乃は汗が
滲むほど吊り革を固く握りしめた。

「可愛い♡乳首がぷっくりしてきたんだけど…もつと強く触って
欲しいの？」

カリカリ♡カリカリ♡

（ちがうのに…♡カリカリされるの嫌なのに、乳首が勝手にぷつ
くりしちゃう♡）

月乃は口を右手で押さえて声を殺す。そうしないと大きな声が出てしまいそうだった。

「あはは、いいよ。その調子で声を抑えててね？ だつてさ、今、俺の姿つて、認識阻害の魔法で周りからは完全に見えてないし、声も聞こえてないから。」

「え……？ ……つ、あ……♡」

「つまり、ルナちゃんがここで我慢できずに声を出しちゃったら……周りの人間からは、一人で感じて、一人で喘いでる変態な女の子にしか見えなないんだよ？」

カリ♡スリスリ……♡♡

(う、嘘……っ、見えてない……!？じゃあ、私、一人でこんな……っ♡)

「ほら、隣のおじさん、不審そうに君のこと見てるよ？一人で変な声出してイッちゃったら、明日からどんな目で見られるだろうねえ？」

キョウマの言葉どおり、隣の乗客がかすかに身動きを変えた。それだけのことで、月乃の脳内はパニックに陥る。

(いや、いやああ……っ♡誰にも見えてないのに、私、こんなに……っ♡恥ずかしい、恥ずかしすぎて、おかしくなっちゃよう……っ!!！)

月乃の胸が電車の揺れに合わせてふるふるっ♡と震える。

触られているのは胸なのにお腹の下のあたりがキュン♡キュン♡と熱くなってもじ…と脚を擦り合わせてしまう。

「んー？ ルナちゃんどうしたの？ もじもじして…そのお腹の下の熱くなつてるところも触って欲しいのかな？」

「……っ！」

（…嘘っ？ バレてる…！ お腹の下の恥ずかしいところが熱くなつてゐるの、バレちゃってる♡）

ルナは顔を真っ赤にして口を手で塞いだまま首を振る。

「へえ、嫌なんだ。じゃあ触っちゃおうつと。」

（……！嫌がつてるのに触ってくるなんて……！魔族ってほんと意地悪っ！）

キョウマはそう言つて笑いながら、スカートの中、下着越しに、月乃の蕾にぴとっ♡と指を当てた。

（あっ……♡私の恥ずかしいところ敵に触られちゃった……♡）

電車が揺れるたび、キョウマの指が僅かに擦れて、月乃の身体がびくっ♡びくっ♡と震えてしまう。

「指当ててるだけでそんなに、ビクビクしちゃうんだ。感度良すぎでしょ。というか、ルナちゃん、ここすっごいびしゃびしゃなんだけど……」

「んっ♡んんっ♡」

「びしゃびしゃって言われてもつと感度上がっちゃった？ ルナちゃんつてもしかして、恥ずかしいともつと感じちゃうタイプ？ こも胸と同じようにカリカリしてあげるね？」

（あっ…♡ダメ♡そこ、カリカリされたら声出ちゃうよお…♡♡）

カリカリ♡カリカリ♡♡

「んっ、んっ♡ ぶんっ、んんんッ♡♡」

月乃の手から力が抜けて、吊り革から手が落ちそうになる。

（手を離しちゃダメ！立ってられなくて敵に寄りかかるなんて魔法少女としてありえない……！）

月乃は意地でも吊り革を離すまいと、指先が白くなるほど握りしめる。

「ハハッ、手ふるふるしてるけど大丈夫？立ってるの辛いなら俺が支えてあげようか？」

月乃は拒絶を示すように、キョウマの言葉を無視して吊り革をぎゅつと握り続ける。

キョウマはそんな月乃の反抗的な態度を見てスッと目を細めた。

「へえ……まだ自分で立ってられるんだ。でもその姿勢、脇がガラ空きって気が付いてた？」

キヨウマは笑って、月乃が吊り革を握っている左側の脇に手を近づけた。

細長い指先を軽く動かして、くすぐるようなジェスチャーをする。

（まっ…まっ…！こんな状態でくすぐられたら…！）

「ふふつ、やめてって顔してる。くすぐっちゃおう。」

キヨウマはそのまま月乃の左脇をこしよこしよつ♡とくすぐるように手を動かした。

（あつ♡意地悪…！今、脇こしよこしよなんてされたら…！）

こしよこしよ♡こしよこしよ♡

「…ふっ…ん、ふふっ…」

月乃の口から笑い声が漏れそうになる。力が抜けて、指先だけが
かろうじて、吊り革に引っ掛けている状態になる。

（やだ…汗で手が滑ってもう落ちちゃいそう。離しちゃダメ…！
敵に寄りかかるなんて絶対に嫌だし、そんなことしたらキョウマは
逃げ場を塞いでもっと触ってくる。…ダメ！…ダメなのにこし
よこしよされたら力が抜けちゃう…！）

こしよこしよ♡こしよこしよ♡

「おっ、意外と耐えるね。じゃあこつちもくすぐつちやお。」

キョウマはさらに完全に油断していた月乃の右脇腹もこしょこしょ♡とくすぐる。

「……ッ！」

電車がガタツと揺れた瞬間、月乃の手が完全に吊り革から滑り落ちた。

（まずい……！手、離しちゃった……！）

支えを失って後ろに倒れそうになる月乃の身体。

しかし、後ろから腕を伸ばしたキョウマが抱き込むようにしてその華奢な身体を掴んだ。

「おっと、大丈夫？ 頑張ってたけど、手、離しちゃったね。」

息がかかるほどの距離の近さを感じて、月乃は慌てて身体を離そうとした。しかし、キョウマは強く月乃の腰を掴んでいて、逃げられない。背中に魔族の温かくも冷たくもない不気味な体温を感じる。

「ちゃんと俺が支えてあげるから、もつと楽しもう？ ね？」

（やだっ…！ 離してよ…）

月乃はキョウマの腕から逃れようともがいたが、キョウマが再び月乃の一番弱いところを弄り始めるとすぐに抵抗の力は奪われた。

「カリカリだけじゃそろそろ飽きちゃうよね。ほら、クルクル♡スリスリ♡もしてあげるね。」

キョウマは指の動きを変え、円を描くように蕾の周りを触ったり、指の腹で優しく蕾を撫でたりする。

クルクル♡スリ♡スリスリ♡

「ほう、…ッ…♡ん、んんうー♡♡」

（んああッ♡ダメえ、そこはッ、そこだけは本当にダメえ……
っ！！声が、我慢できなくなっちゃううう……っ♡♡）

口を両手で必死に塞ぐ月乃だったが、指の隙間から、甘く、切ない声が、どうしても漏れ出てしまう。

それでも真面目な月乃は、必死に歯を食いしばり、涙を浮かべながら、絶対に大きな声だけは漏らさないよう耐えようとする。

そんな健気な抵抗を、キョウマは楽しげに見つめ、さらにその心

を絶望で染め上げる一言を囁いた。

「うんうん、まだ声我慢できるよね？……じゃあそろそろ直接接触
つてあげるね。」

キヨウマは下着に指を引つ掛けて、横にずらした。

（あ、嘘……っ♡下着、ずらされちゃった……、直接はダメええ
……っ♡）

月乃の心の中の悲鳴などお構いなしに、キヨウマの指先が、ぐっ
しりと濡れた月乃の秘部へと直接接触れる。

くちゅ……♡

「あぐっ！ んんんんッッ！！」

（あっ♡下着越しでもダメだったのに直接なんてされたら♡）

「あは、すっごいビショビショ。ルナちゃん、実はこういうの期待してた？」

逃げ場のない状態のまま、キョウマは月乃の耳元でくすくすと下卑た笑いを漏らす。

くちゅ♡くちゅくちゅ♡

「んんっ♡っあ♡…あん♡」

「ねえ、ルナちゃん、恥ずかしくないの？こんな人間だらけのここ

ろで、敵である俺に触られて、こんなに気持ち良くなっちゃってさあ…正義の味方としてどう言い訳するの？」

「…っ！うう、ぐんんっ♡」

キョウマに電車の真ん中でどうしようもなく気持ち良くされてしまっている自分の姿を自覚して、月乃は自分は魔法少女、感じちゃダメだ、と自分に言い聞かせようとした。

しかし、そんな思考さえも、キョウマにぐにっ♡と秘部を押さえつけられると一瞬で吹き飛んでしまう。

「ぐんんんッ♡はっ…♡はあ…♡」

「ハハッ、すごく気持ちよさそうだね。もう正義とかどうでも良くなってるでしょ？」

キョウマは自分の指を月乃の顔の前に持ってきて見せつける。

「ほら、見て見て。俺の指、こんなにびしょびしょになっちゃった。ルナちゃん、トロトロに蜜を溢すんだもん。」

キョウマが指を動かすと、指の間で月乃の透明な蜜が糸を引いた。月乃の顔がブワツと赤くなる。

（嘘っ……!!? 私、キョウマの指がこんなになるくらい濡れてるの……?）

「じゃあ、ルナちゃんのよわよわな胸も触って一緒に触ってあげるね。」

キョウマは、器用に月乃の腰を押さえつけたまま片方の手で突起を責めて、もう片方の手で胸に触れた。

（待つて…上と下同時なんて…ますますトロトロになっちゃう♡
やめてよお…）

首をふるふると振るが、キョウマは気にも留めない。

くちゅ♡カリカリ♡

「ん、んんんん♡♡♡」

「アハハッ、今軽くイッたね。声我慢できて偉いよ。そんないい子なルナちゃんにはご褒美あげないと。」

キョウマはそう言つて更に指の速度を速める。

クチュクチュッ♡♡カリッ♡クチュッ♡♡

「ん♡ん♡ん♡… ああ♡あ♡♡ ああ♡ん♡♡」

月乃は完全にキョウマに身体を預けて、両手を口に押しつけて少しでも声が聞こえないようにする。

（あ♡♡ ああ♡♡♡♡♡ 声出ちゃう♡♡ やめて…！ こんなのが褒美じゃないよ！）

「下のまんこもぷっくりしてきたね。ルナちゃんのクリちゃん素直で可愛すぎでしょ。ほら、まだまだ苛めてあげる。」

クチュクチュ♡カリカリカリッ♡

「んあっ♡…ああっ♡…あんッ♡」

（ダメダメッ♡もう声が我慢できないよお♡
蜜がとろとろって出ちゃう。）

月乃の太ももをつうーと蜜が垂れていく。その感触にさえ、月乃はビクッ♡と感じてしまう。

「面白いね。自分の蜜が流れる感覚にも感じちゃうの？雑魚くてかわいイルナちゃん、そろそろイカせてあげる。」

キョウマの長い指先が、月乃の蕾をピンポイントで捉え、ねつとりと、弄り始めた。

同時にピンツと立った月乃の乳首をグニグニとコネ回す。

クチュクチュクチュ♡♡♡カリカリカリ♡♡♡

「んあああーっ♡♡♡」

（んあッ♡もうダメッ♡気持ちいいしか考えられないっ♡）

「んあ… ああ♡」

「腰ずつとビクビクしてる。ルナちゃん気持ちよくて仕方ないんですよ？」

（ちがうのに♡ ああッ♡もう気持ちいいのとまんない♡）

「首振ってもムダだよ。だってルナちゃんのおまんこ、こんなに嬉しそうにしてるんだもん。」

（だめ、もう、我慢できない……っ♡お腹の奥が、きゅーって、熱くなつて……っ♡♡）

「ほらほら、もうイキそうなんですよ？」

「…んああ♡…ああッ♡♡」

「あははっ！膝ガクガクしてもう完全に寄りかかっちゃってる。ナカに指入れちゃおっ！」

ズプ…♡

「んあッ♡… あッ♡…あッ… ああッッ」

「今、指入れられたらヤバイよねえ。ほら、こころナちゃんの♡ス
ポット…」

（ムリ…♡我慢できない♡ナカから何か熱いのが溢れそう♡♡）

「ほら、イキなよ…」

キョウマは止めとばかりに月乃の耳をじつとりと舐めた。

「んんん、 あ、ああああアアッッッ…♡♡♡♡」

ビクビクビクビクッ!!!

月乃は限界を迎えて大きな声を上げて派手に絶頂した。

（んああああーっ♡♡♡ イッちゃった、私、電車の中で敵にイカされちゃったあ……っ♡♡ 声、声も出しちゃった…どうしよう、周りの人にバレちゃったよぉ♡）

月乃の全身からガクツと力が抜けて、完全にキョウマに身体を預けたまま、荒い呼吸を繰り返す。

「…あつ……♡ んっ…あつ……」

せめて顔を見られないように、周囲の人と目を合わせないように俯く。

しかし、月乃の予想に反して、周りの人たちは相変わらずスマホや本を見たまま、何の反応も示さなかった。

(……………?…………あれ? どうして? 私、あんなに大きな声出したのに…………)

月乃の疑問を察した様子でキョウマが種明かしした。

「不思議そうな顔してるね、実はルナちゃんにも認識阻害の魔法かけといたんだよね。ほら、他の魔法少女が来たら面倒だし。でも、絶対バレないのに、バレちゃダメって頑張るルナちゃん、すごく可愛かったよ?」

キョウマの、意地悪で、ひどく楽しそうな囁きが耳元に降ってくる。

(…………バレてない? ……良かった…………でも、それって絶対に仲間が助

けに来てくれないってことだよね…？まあ、流石のキョウマでもこれだけ好き放題したんだから、そろそろ飽きて帰ってくれかな？

「次は、くく大学前、くく大学前…」

「あつ、降りなきゃ…」

月乃の大学の最寄り駅へ到着する電車のアナウンスが聞こえた。いつもと変わらない日常の朝。それが敵の魔族の手でメチャクチャに破壊されてしまったという事実には涙が出そうになる。

電車が止まり、プシュー、と音を立てて電車のドアが開く。

「ほら、足動かして。ここで降りるんでしょ？」

「ん、あ……っ♡」

（下着、びしょびしょで気持ち悪い。でも歩かなきゃ……）

キョウマに半ば引きずられるようにして、月乃は重い足取りで電車の外へ向かう。全身に力が入らず、ろくに抵抗もできないまま、キョウマに身を委ねて歩く。

（これで電車の外には出られたし、キョウマが帰らないなら、変身して戦わないと……）

月乃がそんなことを考えながら、電車の外へ一歩踏み出した瞬間、ぐにやりと視界が歪んだ。

「え………？」

月乃は思わず驚きの声を上げた。そこにあったのはアスファルトのホームでも、改札口でもなかったからだ。

足元にはふかふかの高級な絨毯。目の前には、薄暗い間接照明に照らされた、妖艶な雰囲気が漂うキングサイズのベッド。そこはまるで、ホテルの一室のような空間だった。

「…え？ ええっ……？ キョウマ！ ここはどこなの！？」

驚きと恐怖でパニックになる月乃を、キョウマはそのままベッドの上へと押し倒した。

「きやつ…！」

ふわりと柔らかいマットレスに身体が沈む。

「ん？どこって、俺が作った空間。人間ってこういう場所でエツチなことするでしょ？…ってルナちゃんはウブだから知らないか。

「

ベッドに沈み込んだ月乃を、キョウマがニヤニヤと見下ろしながら上から覆いかぶさってくる。

しかし、月乃もいつまでも怯えているわけではなかった。

（ここなら周りの人を巻き込む心配もない。変身して、戦える…！）

月乃は変身道具の指輪に魔力を流そうとしたが、すぐに違和感に

気がついた。

(……………？ えっ？ 嘘、でしょ……！？)

慌てて自分の右手に視線を向けて、一気に血の気が引いた。
肝心の指輪が指から跡形もなく消えているのだ。

「あはは！ ルナちゃん、もしかして、これ探してる？」

頭上から降ってきた軽薄な笑い声に弾かれたように顔を上げると、
キョウマが月乃の顔の前で、ヒラヒラと指輪を弄んでいた。

「あ……っ！ 返して！ なんであなたがそれを……っ！？」

月乃は必死に手を伸ばそうとするが、キョウマはそれをひよいと

避けて、愛おしそうに指輪を眺めた。

「なんでって、ルナちゃんが電車の中で俺の指にめちやくちにされて、すごい声出してイッちゃった時さあ…聖なる加護がほとんど働いてない状態になってたんだよね。防衛機能もガタガタの無防備。だから、ほら、ついでに指からスルツと抜いたんだ。」

「う、嘘……っ！？……あんな時に……っ」

あまりの卑劣さと、自分の身体が快楽に溺れて隙だらけになっていたという事実により、月乃は言葉を失う。あの絶頂の最中、感覚が麻痺していた月乃は、大切な指輪を奪われたことにすら気づけなかったのだ。

「ハハッ！わかりやすく絶望してる。ルナちゃんのその顔、俺、結

構好きだよ。」

キョウマは笑いながら、ちゅっ♡と音を立てて月乃の指輪にキスをする。

「これで正真正銘、ただの無力な人間の女の子になっちゃったね、ルナちゃん。変身もできない、助けも来ない……」

キョウマは指輪の三日月の飾りの先端でつうーつと太ももをなぞった。月乃は思わずんっ♡と声を漏らす。

「そのくぐもった声も可愛いけど、そろそろ甘くて情けない月乃ちゃんの喘ぎ声が聞きたいな。いっぱいいっぱい可愛がってたくさん啼かせてあげるね……」

月乃はベッドの中に身体を沈めたまま、さらなる蹂躪の予感に身体を震わせることしかできなかつた。